

国立国際医療研究センターにおける感染管理と臨床マネジメント

～パプアニューギニアにおける感染症危機管理研修～



国立研究開発法人 国立国際医療研究センター
国際感染症センター

石金正裕

内科医、感染症科医のトレーニング後、国立感染症研究所 FETP (Filed Epidemiology Training Programme) で実地疫学を学び、現職に至っています。FETP在籍中はWPROでの勤務経験もあります。



国立研究開発法人 国立国際医療研究センター
国際感染症センター

大曲貴夫

佐賀医大医学部卒業、聖路加国際病院、テキサス大学ヒューストン校、静岡がんセンターを経て現在国立国際医療研究センター病院国際感染症センター長。

国立国際医療研究センターの紹介

国立国際医療研究センター (NCGM : National Center for Global and Medicine) は、日本に6つあるナショナルセンターのうちの1つのセンターになり、2018年には創立150周年を迎えました。感染症はNCGMの専門領域の1つであり、国際感染症センター (DCC : Disease Control and Prevention Center) は、その中心を担っています。

DCCでは、

1. 臨床感染症の clinical referral center として機能する
2. 感染症領域の人材育成 / トレーニングへの注力
3. 情報の発信源となりネットワーク



に努める

4. 国内外の感染症の研究拠点となる
5. 実地疫学の実践

の5つを活動の柱に据え、国内・国外の感染症に関する包括的・多面的・先進的な取り組みを行っています。

DCC内には総合感染症科、トラベルクリニック、国際感染症対策室の3部門が存在します。総合感染症科は診療科横断的な感染症コンサルテーションおよび輸入感染症・一般感染症の入院・外来診療を行い、トラベルクリニックは渡航者の渡航前から帰国後までの健康管理のため、健康診断や予防接種、慢性疾患管理指導、帰国後診療等を行っています。国際感染症対策室は新興・再興感染症の現地調査、診断・治療などを行い、医療従事者に研修会や情報を提供することでわが国の感染症対策に貢献しています。さらに、NCGMは国内で4カ所指定されている特定感染症指定医療機関の一つとして新感染症病棟を有し、DCCが管理を担当しています。医療関連感染対策では院内では感染対策チーム (ICT : Infection Control Team) に参加し活動を担い、地域医療機関とネットワークを形成し実践的な取り組みを行っています。研究活動では多施設共同研究を含む臨床研究、輸入感染症の診断治療、ベトナム拠点での医療関連感染症研究に加え、研究所において遺伝子検査を中心に臨床微生物学的研究を行っています。

WHO協力センターとしての役割

DCCは、WHO西太平洋事務局 (WPRO: WHO Western Pacific Region) の要請に基づき、2017年4月21日にWHO協力センターに認定されました (WHO Collaborating Centre for Prevention, Preparedness and Response to Emerging Infectious Diseases)。薬剤耐性菌感染症を含む新興再興感染症の感染管理や臨床マネジメントが主な役割です。

また、2018年9月に、WHO本部 (WHO HQ: WHO Head Quarter) より依頼があり、「国際保健規則 (2005) と健康危機のための戦略的なパートナーシップ」のサイトへ掲載して頂くことになりました。薬剤耐性 (Antimicrobial resistance)、予防接種 (Immunization)、緊急準備 (Emergency preparedness)、緊急時対応活動 (Emergency response operations)、対抗医薬品と要員展開 (Medical countermeasures and personnel deployment) の5つの分野で登録頂いています。

個人や社会をおびやかす新興感染症に対して、その発生を予防すること、迅速な対応を開始し発生時の影響を最小限にすることとアウトブレイク対応の支援を関連諸機関ともに行うことで、WHOの活動をサポートします。



参加者の集合写真



ポートモレスビー ジェネラル病院でのラウンドの様子

具体的な事業紹介

2017年4月の認定以降、DCCは、WRPOと協力しながら多くの活動を行っています。具体的には、2017年10月には、インドネシアのスリアンティ・サロッソ病院（インドネシアの感染症専門医療機関）の医師と看護師計8名を対象とした3日間にわたる新興再興感染症および院内感染症対策研修を行いました。2018年2月には、WPROからの要請に基づいて、ピョンチャンオリンピックで流行したノロウイルス感染症に対するQ&Aを担当しました。

さらに2018年7月には、パプアニューギニアポートモレスビー市で開催予定（11月）のアジア太平洋経済協力（APEC：Asia Pacific Economic Cooperation）会議前に、感染症危機管理を強化する研修をWHO西太平洋事務局、パプアニューギニアWHOカントリーオフィス、パプアニューギニア保健省と協力して実施しました。

本項では、パプアニューギニアにおける感染症危機管理研修について詳しく説明します。この研修はAPECがパプアニューギニアで開催される初めてのマシガザリングであるために、感染症の拡大を防ぐために企画されました。4日間にわたる研修で、ポートモレスビー市内

の4医療機関における院内感染対策の責任者、WHOカントリーオフィス、保健省、計20名が参加しました。研修では、講義、ディスカッション、シミュレーション訓練、病院ラウンドが行われました。具体的には、

1. 感染予防・管理の概要、現状の共有とこれまでの取り組み（講義）
2. 手指衛生、標準予防策と感染経路別予防策（実技）
3. AMR（薬剤耐性）の概念と重要性（講義）
4. 医療機関におけるアウトブレイク探知と対応、これまでの経験から得た教訓（講義とシミュレーション訓練）
5. チェックリスト用いた参加施設における感染対策チームラウンド（実技）
6. WHOアセスメントフレームワークを用いた自己評価（ディスカッション）
7. 感染予防・対策に関する医療安全推進のための計画策定（ディスカッション）
8. 感染予防・対策改善に向けた計画の共有とフィードバック（ディスカッション）を行いました。

研修を通じて、ポートモレスビー市内の各医療機関の感染対策責任者間で顔の見える良いネットワーク作りができました。このことにより、ポートモレスビー市内の医療機関における感染予防・対策の底上げに繋がると考えられました。



Personal Protective Equipment脱着指導の様子

APECに向けての感染予防・対策に関するアクションプランの作成に関して、2016年にWHOより公開された「感染予防・対策にかかわる8つの要素」をもとに、各医療機関の感染予防・対策の現状を8つの要素に分けてスコア化できました。各医療機関により点数にばらつきがみられ、介入すべき項目が異なっていました。このような状況において、現状と達成すべき目標に相違がある場合、相違の内容、最終的なアウトカム、介入すべき対象者、介入内容、介入期間、必要な予算、責任者を明確にしたプランが作成できました。

11月に予定通りAPEC会議が開催されましたが、大きなアウトブレイクは起きませんでした。また、本研修については、WPROのウェブサイトに掲載されました。

引用

1. 国立国際医療研究センター 国際感染症センター . Available at <http://dcc.ncgm.go.jp/index.html>
2. 国立国際医療研究センター 国際感染症センター WHO協力センター . Available at <http://dcc.ncgm.go.jp/activity/WHOCC/index.html>
3. WHO HQ. Strategic Partnership for International Health Regulations (2005) and Health Security (SPH). Available at <https://extranet.who.int/sph/donor-partner-landscape> and <https://extranet.who.int/sph/donor/12259>
4. WPRO. WHO strengthens collaboration for infection prevention and control in the Region. Available at <https://www.who.int/westernpacific/news/feature-stories/detail/who-strengthens-collaboration-for-infection-prevention-and-control-in-the-region?fbclid=IwAR0cpY7pUEEpEsK6GgkhvC4hmfX1bH86IghHBOQ6zFxiH4AcwzGAD8nWE>